

令和7年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
61	川崎市立下作延小学校	大泉文人

学校教育目標	今年度の重点目標
○心身ともに健康で豊かな心情とたくましい実践力をもつ児童の育成	◇「自己調整学習」の考え方に基づく教科指導、「心理的安全性」に基づく学級経営 ・学び合う楽しさを知り意欲的に学習する・互いの違いを認め合い、思いやりの気持ちをもつ ・主体的に活動し自己有用感を育む・健康で安全な生活を送る ・地域のよさを生かした学習をし愛着を深める

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
基礎・基本の確実な習得と活用する力・互いに高めあう児童の育成	<ul style="list-style-type: none"> ◆学びの意欲を高め、「わかる」「できる」「楽しい」授業をめざしました。 ◇全教科を通して学びの意欲を高め、「わかる」「できる」「楽しい」を実感し、共に学び合う児童の育成。 ◇既習経験を生かし、意欲をもって学べるよう授業の工夫。また、互いの考えや思いを交流することを大切に、友だちのさまざまな考えを知り、そのよさや違いのわけを考えることで、よりよい学び合いが生まれ、成長しあえることをめざす。 ◇朝の短時間学習等を通して、基礎・基本的な問題に繰り返し取り組んだり、60分授業に取り組んだりすることによる知識・理解のさらなる定着。 ◇自己調整学習の考え方を大切にし、『何を学ぶか』『どのように学ぶか』を意識した授業改善を行い、能動的・協同的・相互交流がある授業の実施。 ◇川崎市学習状況調査の結果をもとに、子ども達に身に付けさせたい力を明らかにした指導の実施。 ◇国語科教育の研究の推進と児童の表現力・思考力を高める指導の実施。 	<ul style="list-style-type: none"> □児童の「疑問」を大切に、何を学び、どのように解決していくのかを、みんなで考えていくような授業を実践した結果、児童の学びの向上につなげることができた。 □「学びの意欲を高め、わかる・できる・楽しい授業」づくりをめざした結果、児童の学習意欲は過去3年間、高い水準で安定している。アンケートの結果では、昨年と比較して、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した児童は、2.3%、保護者は、3.6%増加した。 □国語科を中心に、「思いや願いをもち、自ら考え、ともに学び合う子」というテーマで研究を進め、特に、今年が「かかわり」を大切にし、友達との対話を通して、学びが広がり、深まるような国語科の授業に各学年が取り組み成果をあげることができた。 □基礎・基本を定着させるための「反復学習」によって「できるようになった！」という実感を育て、この実感が、次の「やってみよう」という意欲と自信につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆「何を学ぶか、どのように学ぶかを大切にしたい授業改善」を進めるとともに、反復学習を取り入れた学びの土台を確実にしながら、問題解決的な学びを深め、「基礎・基本の確実な習得と活用する力・互いに高めあう児童の育成」に取り組んでいく。 ◆児童の「なぜ?」「どうして?」という問いを大切にしたい学習を進め、自分で考え、判断し、解決することを重視する問題解決的な学びを志向しながら、未来を開く思考力の育成に取り組む。 ◆自己調整学習の考え方に基づき「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を重視して、学び方を学ぶ学習を進めることをとおして、主体的、対話的で深い学びを追究する授業改善に取り組む。 ◆川崎市学習状況調査の結果を分析し、児童の学習状況を的確に把握しながら、各学年の児童が抱える課題を明らかにするとともに、その改善・身に付けなければならない力を育む授業改善を行い指導にあたる。
②個に合わせた支援の充実	<ul style="list-style-type: none"> ◆学習に「不安」を感じる子ども達が、少しでも「安心」なものと感じることができるよう指導・支援を行いました。 ◇教科担任制(3年生以上での授業交換)、専科教員による指導による指導力の向上、指導内容の充実。 ◇少人数指導、学校サポーターによる支援や学習センターを活用した指導・支援等の実施。 ◇少人数指導のよさを生かしたより計画的で、児童が「わかる」「できる」と実感できる学習指導、学習支援を充実。 ◇児童の思いに合わせた学び方、日常的につまづくことが少なくなるような指導を進め、児童の学習進度や個性に合わせ学びが深まるような指導を行います。 ◇学びの個性化・個別化を意識した学習活動の推進。 	<ul style="list-style-type: none"> □高学年を中心に音楽・外国語・社会科の専科指導を実施したり、学年内で教科の交換授業を実施したりして、教科担任制による指導内容の充実を図ることができた。 □学校サポーターによる支援や学習センターを活用した指導や支援等も行い、さらに、「選択」と「習熟度別学習」のよさを生かした指導に取り組むことで基礎的・基本的な学力の定着に成果をあげることができた。 □専科指導、教科担任制を取り入れることで、学習指導の均質化が行われ、学級間の指導内容や指導レベルの格差を解消することができた。 □学習センター・教室での指導において、一人一人の児童にあった学びの個性化・個別化を意識した学習指導を進め、児童の学習意欲の向上につなげることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆学年内における教科担任制や専科教員による指導の充実については引き続き行い、学びの個性化・個別化を意識した個に即した指導内容の充実を図っていく。 ◆教員のチーム体制のもと児童の学びを支えながら、指導内容の充実、一人一人が輝く学びをめざしながら、安心して学習に取り組んでいける環境づくりに取り組んでいきます。 ◆別室指導、学習の難しさに不安を感じている児童の増加傾向にある状況をふまえ、問題点や課題を洗い出し、学習センターの効果的運用、それぞれの教室における指導方法の研究を進め、基礎・基本の定着を図る学習指導に努め、学習意欲の向上に向けた取組を推進していく。 ◆教員が「教える」役割から、児童の学びを「支える」役割に変わろうとしている今、児童の学びとは何かを考え、児童の学びを支える学習環境づくりに引き続き取り組んでいく。

3	<p>③防災・防犯教育の充実</p>	<p>◆児童の災害に対する意識を高めていく指導を行いました。 ◇地震・火災の他、洪水や台風等の避難も視野に入れた、より充実した防災・防犯教育の取組。 ◇発災時の児童の安全確保はもとより、児童への防災教育を通じた避難所となる学校施設を有効活用の方法と地域住民の避難所利用の理解推進。 ◇保護者・地域・西高津中学校区内学校等と合同した、より実践的訓練の実施と、災害に対する意識の向上。 ◇風水害を含めた発災時の避難や下校の仕方について検討・マニュアル等の整備。</p>	<p>□防犯教育については、カリキュラムに組み入れ訓練を実施することができ、防犯防災の意識を高めることができた。 □西高津中学校区4校合同引き渡し訓練を実施し、より実践的な訓練を行い、発災時の状況を想定した訓練を行うことができた。 □水害を想定した垂直避難の訓練や事前に知らせることなく地震対応の避難訓練を行うなどのより実践的な訓練を行うことで、意識を高めることができた。 □2月の下作延小学校避難所開設訓練では、4年生の児童が参加し、総合的な学習の時間において取り組んだ防災に関する学習の成果を地域の方々に発表した。その結果、防災の大切さについて発信し、地域住民の防災意識を高めることにつながった。</p>	<p>◆学校防災計画を見直しながら、災害や防犯など今年度行った実践的な訓練の質をより高め継続して実施していく。 ◆「自分の身は自分で守る」を合言葉に、発災時に求められる行動について、指導を行うとともに防災への意識をより高める指導を継続して行っていく。 ◆防犯教育、防災教育については、さまざまな状況を想定した避難訓練を適時実施していく。 ◆西高津中学校区内の小中学校と合同した実践的な避難訓練を今後も継続していく。 ◆下作延小学校における防災マニュアルを適宜見直し、より状況に即したものに改善していく。</p>
4	<p>④情報教育の充実</p>	<p>◆発達段階に応じた正しい情報リテラシー・情報モラルを身につけることができるようにしました。 ◇一人一人が一台のGIGA端末を利用しながら、機器の操作方法の系統的に指導。学習における適切に活用できる力と態度を育成。 ◇発達の段階に合わせて系統的に情報モラル教育を進め「適切なコミュニケーション能力」の育成。 ◇教職員がGIGA端末を学習において適切に活用できるよう、研修の実施。 ◇外部講師などを招いた情報モラル教育の全学年での実施と、配信システムなどを活用した、情報モラルの向上に向けての資料・情報の保護者への配信。</p>	<p>□「情報モラル教育」「適切なGIGA端末の活用」を中心に取組を効果的に進めることができた。 □情報モラル教育では、高津警察署などから外部講師を招き指導を行い情報モラルの定着に効果をあげることができた。 □学級毎の情報モラル授業や長期休業中の情報モラルに関する動画視聴を保護者と一緒に行った。 □情報教育の充実に向けた適切なGIGA端末の活用では、低学年もGIGA端末を使うことに慣れ、音声入力や手書き入力ができるようになった。 □日々の学習の中でGIGA端末を活用することは当然のこととなり、GIGA端末を使って資料を探し、自分の学習課題を解決していく児童の姿が多く見られるようになった。</p>	<p>◆情報リテラシー、情報モラルについての指導を今後も行っていく。 ◆情報モラル教育については、適時年間指導計画を見直し、適切な時期に指導が行えるようにするとともに、外部講師を積極的に招聘し、その時その時に求められる情報リテラシー及び情報モラルについての指導を行っていく。 ◆特に、SNSの危険性について児童がきちんと理解することができるよう指導を行っていく。 ◆今後も、情報モラルについては、親子での関連動画の視聴や情報モラルについての授業参観の実施などを通して、児童、教職員、保護者、三者が学ぶ機会を設定し、情報モラル定着の取組を進めていく。</p>
5	<p>⑤健康教育・運動する児童</p>	<p>◆児童が自分の身体を意識し、健康や体力に関心をもつことができるように指導しました。 ◇日々の体育授業や養護教諭・学校栄養士による健康に関する授業の実施。 ◇日常的な衛生管理への意識向上と、健康や体力に関心をもつ児童の育成。 ◇年間を通じた特別活動におけるカリキュラムの健康教育に関する視点からの見直し。 ◇衛生指導、歯磨き指導・食育・保健・給食などの教育活動の充実。 ◇キラキラタイム・キラキラチャレンジの充実による運動の楽しさの実感と体力や運動への関心・意欲の向上。 ◇拡大学校保健委員会などの開催を通しての、保護者とともに、児童自身が自分の健康について意識し考える機会の場の設置。</p>	<p>□「拡大学校保健委員会」「キラキラタイム」などの教育活動、日々の体育授業や養護教諭・学校栄養士による健康に関する授業を通して、日常的な衛生管理への意識を高め、健康や体力に関心をもつ児童の育成を行うことができた。 □拡大学校保健委員会では、「食育」をテーマに、5、6年生を対象に外部講師を招いて自分の健康に向き合うきっかけづくりを行い、「食育」についての関心を高めることができた。 □キラキラタイムにおいて、遊びの要素を取り入れながら、誰でも簡単に繰り返し行える運動を行い、体力の向上を図る取組を進めることができた。 □「健康教育・運動する子どもの育成」についての取組の保護者回答結果、「とてもそう思う」「そう思う」が76.8%と肯定的な評価が低い結果となった。今後は、本校の「健康教育・運動する子どもの育成」についての取組に対する認知度を高めていく。</p>	<p>◆運動の日常化を図るために、遊びの要素を取り入れ、本校に児童の体力にあわせたキラキラタイムの内容の再検討及びキラキラタイムのさらなる充実を図る。 ◆今年度の拡大学校保健委員会は、体育館改修工事のため、児童のみでの実施となったが、来年度は児童・保護者がともに参加し、自己の健康について学び、健康への意識を高めるよい機会としたい。 ◆学校での健康教育、運動についての取り組みなどを保護者に積極的に情報発信するとともに、家庭と協働し健康教育を充実させる活動を進めていく。</p>

6	<p>⑥地域に愛着をもてるような教育活動の推進</p>	<p>◇学校教育目標に即した、目的をもって地域に出かけ、地域のよさを実感できる教育活動の実施。 ◇積極的な地域の教育資源の開発、地域の人材・地元企業と連携した教材開発・授業開発の推進。 ◇生活科・総合的な学習の時間・社会科の学習、学校行事等での地域の「人・もの・こと」との出会いやふれあいを通して地域を愛する気持ち、感謝の気持ちの育成。 ◇「SHIMOSAKUNOBE PRIDE」「かわさきPRIDE」を意識した学習活動の取組と実践。 ◇低・中・高学年ごとや学校全体での地域とのかかわりを大切にしたカリキュラムを作成と実践。 ◇学校運営協議会のサポート部門と連携した地域・保護者による学校サポート体制の充実。</p>	<p>□「SHIMOSAKUNOBE PRIDE」を意識し、目的をもって地域に出かけ、地域のよさを実感できる教育活動を取り入れながら、積極的に地域の教育資源の開発、地域人材・地元企業と連携した教材開発・授業開発を進めることができた。 □今年度は、新規外部講師2名による、5年の総合的な学習の時間における環境教育の分野において指導を受けることができた。 □地域の方や専門家の方々に学ぶ「かがやき交流DAY」は、児童が「身近な素敵な大人」と出会い、その生き方や好きなことに触れることで、新しいことに挑戦する気持ちを高めることができた。また、新しいことに挑戦し、その活動をふりかえることで、自分への気づきにもつながることができた。 □「かがやき交流DAY」において地域から「受信」した刺激は、「かがやき発表DAY」における「発信」へとつながり、地域の方々に支えられ、多様な表現活動に取り組む中で、一人一人の個性と地域への誇りを確実に育てることができた。</p>	<p>◆下作延にある地域の教育資源の活用・地域人材との交流を通して、自ら学び、自ら考える力を育て、自分自身が地域の一員であることを理解し行動できることをねらいとし、今後も取組を継続していく。 ◆これまでの各学年における下作延の地域の教育資源・人材などを教材とした学習計画を再度見直し、地域・地元企業との密接な連携を意識したカリキュラムの整備・更新を進める。 ◆地域人材リストの整備・更新を図りながら、本校の教育活動のさらなる推進に寄与する外部講師の獲得に努める。 ◆さまざまな教育活動や学校行事、かがやき交流DAYにおいて、地域の人材を生かした教育活動の充実を図り、児童に下作延地域のよさに目を向けさせ、郷土愛を育む教育活動の充実を図る。</p>
7	<p>⑦主体的に取り組む気持ち、自己有用感の育成</p>	<p>◆よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる学習指導を行いました。 ◆子ども達一人一人が自己肯定感・自己有用感を高め、自信をもって行動できるようにしました。 ◇児童の創造性を大切にし、児童の発想を生かし意欲を高めることができるような指導の実施。 ◇委員会活動・クラブ活動、係活動その他の活動における児童の発想や意欲を生かした活動の取組、児童自身が「楽しい学校」を創造できるような指導の実施。 ◇運動会やかがやき交流DAYなど、全ての学校行事における、児童の発想を大切にした活動の推進。 ◇さまざまな学校行事を通して協働することの大切さ、連帯感・自己有用感・自己達成感を高めていける指導の実施。 ◇SDGsにかかわる学習活動に意識を向けさせた指導の充実。</p>	<p>□開校記念と市制記念を祝う「お誕生日集会」、水曜日の朝に全校児童が体育館に集合して行う「全校ミーティング」、6年生が企画・運営を行う「運動会」など様々な場面で、児童の創造性を大切にし、児童の発想を生かしながら、主体的に取り組む気持ちや自己有用感、自己達成感を高める取組を効果的に進めることができた。 □児童の思い、発想、創造力を教員が認め、児童の願いが形となって実現するよう丁寧な支援を行うことで、児童が自主的な活動の意味とその意義を理解し、児童自身に連帯感や達成感をもたせることができた。 □学校内における学習活動について、SDGsの何にかかわっているのか児童が意識できる指導を効果的に行うことができた。 □SDGsにかかわる教育活動や指導が不十分であった。</p>	<p>◆児童の何事にも主体的に取り組む気持ちや自己有用感を高める取組は、下作延小学校の教育活動の中でも特に大切にしているものであり、「主体的に取り組む気持ち、自己有用感の育成」を担う特別活動のさらなる充実を図るために、OJTを生かした職員研修の実施や特別活動部会を設けるなどし、職員一人一人の実践を共有していく。 ◆職員全員が児童の肯定感・自己有用感を育む重要性について共通理解をし、「チーム下小」として児童の主体性を育む特別活動に組織的に取り組んでいく。 ◆SDGsにかかわる教育活動に意識を向けさせた指導を常に念頭におき、指導の充実に取り組んでいく。</p>
8	<p>⑧一人ひとりが命の重さや価値を実感し、他者を思いやる気持ちをもつ児童の育成</p>	<p>◆思いやりをもって自他ともに命を大切に子どもに育てました。 ◇年間の教育活動(人権週間の場や、子どもの権利学習、SOSの出し方・受け止め方教育実施)や学校行事における教育活動を通して、児童自身が自分も相手も大切にできる意識の醸成。 ◇美しいもの、素晴らしいもののであったり、感動したり、生き生きと生活する大人に触れたりして、心が豊かになる時間を過ごすことができる機会の計画的な提供。 ◇人にやさしくしたり、役に立ったりした時に自分の心も豊かになることを実感できる教育活動の充実。</p>	<p>□一人一人が命の重さや価値を実感し、他者を思いやる気持ちをもてるよう、年間の教育活動(人権週間、子どもの権利学習、SOSの出し方・受け止め方教育実施)などを通して、児童が自分も相手も大切にできるよう指導を行った。 □自分も相手も大切にできるように命の重さや価値を実感できるようにと、4年生で福祉体験、6年生は誕生学アトバイザーを外部講師として招き、生命の尊さについて学ぶ機会を設けた。 □「キラキララジオ」「いいところさがし」など、日常的に児童一人一人が、自分にも友達にも、それぞれがもつよさがあることに気付いていけるような活動を積み重ねることで、自分のことも、まわりの人のことも大切にすることの成長が見られた。</p>	<p>◆児童一人一人が、自分のよいところ友達のよいところに気付き自分も友達(他の人)も大切だと実感できる機会(経験)を重ねていく機会を今後も設定する。 ◆誰かに優しくしたり、誰かから優しくされたり、誰かの役に立つことをしたり、誰かから助けられたり支え支えられ、思い思われることで喜びを感じる機会を積極的に設定することで、自分も友達も、思いやりをもって大切にできるようにしていくことを今後もめざす。 ◆来年度も保護者への「SOS出し方・受け止め方教育」の説明を行う機会・場を必ず設け、児童・保護者への「SOS出し方・受け止め方教育」の浸透を図る場を設けるとともに、本校の人権教育についての方針について理解を深めていただくように努力する。</p>

9	<p>⑨共生・共育の実施、コミュニケーション力の育成、いじめを許さない学校風土の創造</p>	<p>◆子ども達がいじめに対する意識を高めるとともにコミュニケーション力を育成しました。 ◇各学年6時間の「共生＊共育プログラム」を行い、社会性のスキルの習得を図る指導の実施。 ◇いじめ防止に向けて、一人一人の思いをくみとる「学校生活アンケート」の実施 ◇教職員はいじめ防止委員会を計画的に開催し、教職員で課題を共有しながら、いじめ防止・問題解決の取組の推進。 ◇支援教育コーディネーターを中心に、児童の心に寄り添ったチーム支援の実施。 ◇学級における心理的安全性の考え方にに基づき、児童自身がよりよい学級や学年、学校を創ろうという意欲が持続できる取組。 ◇子どもとともに居心地のよい学校、学年づくりを進める教員の取組の推進。 ◇児童の情報を共有し、いじめ防止に向けて、教職員全体が共通の認識をもつための職員研修や会議等の設定。 ◇支援教育コーディネーターを中心に、学校巡回カウンセラーをはじめ広い視野での連携を図り、保護者の不安の解消する取組。</p>	<p>□今年度もコミュニケーション力の育成・いじめを許さない学校風土の創造をねらい、取組を進めることができた。 □いじめを許さない学校風土に向けて、朝会を活用し全校児童に向けて、いじめとはどういうものなのか、いじめは絶対にしてはいけないことだ、ということ、教員・児童ともに共通理解を行った。 □「いじめ防止基本方針」「いじめの定義」の確認、事例に基づくいじめ対応など職員研修を実施することができた。 □年間3回「学校生活アンケート」を実施し、児童の様子を多角的な視点で把握し、その結果に基づき、児童全員との教育相談(担任と一対一での対話)を行い、実態を確認し、いじめの未然防止、対応に努めることができた。 □「共生＊共育プログラム」では、社会性のスキルの習得に努めた。児童アンケート結果では、「とてもそう思う」「そう思う」と94.2%の児童が、これらの指導を受けてきたことを実感していることがわかった。</p>	<p>◆今後もこれらの取組を継続して行い、引き続き「いじめを許さない意識」を高める指導、「いじめを許さない」学校風土の創造に努める。 ◆「学校生活アンケート」を今後も行いながら、より効果的なアンケートの活用方法を検討するとともに、さまざまな方法で児童の様子を多角的、多面的に把握する試みを行いながら、いじめの未然防止に取り組んでいく。 ◆人間関係の構築に必要なコミュニケーション能力の育成する指導を引き続きおこなうとともに、心理的安全性に基づく学級経営を行い、児童が安心して共に過ごせる学級づくり・環境づくりに努める。 ◆SHIMOSAKUNOBE PRIDEにある「自分を大切に思い」「他者を認め」を意識した教育活動を常に行いながら、良好な学級内における人間関係作りができるような指導を行っていく ◆児童理解、児童指導についての教員研修を随時行いながら、いじめの未然防止、児童指導における教員のスキルアップに努める。 ◆児童の人権を尊重するための研修を行い、教員の児童に対しての人権意識を高める取組を実施していく。</p>
10	<p>⑩皆が気持ちよく過ごせるための規範意識の育成</p>	<p>◆自分の生活をふり振り返りながら、よりよい行動ができるよう指導しました。 ◇掲示物や全校ミーティングなどで、児童自身が気持ちよく過ごすことができる学校生活のルール作りについて考える機会・場の設定。 ◇学級での生活目標や個人での「生活ふり振り返りカード」を活用した、規範意識の育成。 ◇学校内において、互いに気持ちよく過ごすためのルール作りや意識づくりについての、児童自身の参画。 ◇他者に対する感謝の気持ち、ルールを守って生活することの大切さの継続的指導。 ◇落ち着いて生活を送るために、自分を制する気持ち、我慢をする経験等についてはさらなる成長が必要と感じているための、社会生活に必要なスキルの育成。</p>	<p>□学校生活をよりよく過ごすために「生活目標」を1～2ヶ月ごとに設定し、振り返る活動を実施し、規範意識の育成に効果をあげた。 □児童一人一人の発想を大切にしながら、全校ミーティングや各委員会活動を通じて、学校全体で規範意識を高めるイベントやキャンペーンを行うなど、児童自身が自分たちの学校を自分たちの手でよりよくしていく取組を実施した。その結果、全校における規範意識の向上につなげることができた。 □児童のアンケートでは、学年が上がるにつれて、規範意識が高まっている様子がかがえ、取組の成果が出ていることを実感することができた。</p>	<p>◆「生活目標」「生活のめあて」「生活振り返りカード」の取組を今後も引き続き進めていく。 ◆全校児童が集合して行う全校ミーティングの場を活用し、自治的な風土を醸成しながら、校内のルールや学校生活上のきまりについて、自分事として考えることができるよう指導を行っていく。 ◆学校生活における活動を通して、児童一人一人が「考え、行動し、ふり返る」中で、規範意識をもった行動をとり、ルールを守ったり、自分たちの課題を主体的に改善したりしようとする意識を高めていく。 ◆児童一人一人の行動が、自分たちにとって心地よい学校をつくることにつながっていると感じられるよう、今後も必要に応じて、保護者とも情報共有し、よりよい行動ができるよう引き続き指導に努めていく。 ◆引き続き、他者に対する感謝の気持ちを持ち、ルールを守って生活することの大切さを指導していく。</p>

11	⑪危機管理・施設の整備	<p>◆日常的に身の回り危険に対応できるよう指導を行いました。</p> <p>◇心肺蘇生法・AEDやアレルギー、熱中症防止等の研修の実施と学校安全マニュアルの活用</p> <p>◇地域の安全見守り、避難所運営会議、PTAと連携した児童の安全確保。</p> <p>◇交通安全教育、薬物乱用防止教育等を実践し、安全に対する意識向上。</p> <p>◇教育委員会、地域、保護者と協働し、学校施設設備環境の改善。</p> <p>◇熱中症防止や学校安全マニュアル等の危機管理に係るマニュアルを見直し、整備。</p> <p>◇子ども達の安全・安心に関する意識を高める指導の継続。</p>	<p>□心肺蘇生法、AEDの使い方や食物アレルギーに関する職員研修を実施し、日々、児童一人一人を守る教職員の危機管理意識の向上に努めた。</p> <p>□児童の安全確保を意識した学校施設の改善に努めるとともに、よりよい学習環境・生活環境の創造に努めた。</p> <p>□登下校時に児童の安全確保、見守りに携わる地域の方、PTAと連携し児童の安全確保を図った。</p> <p>□高津警察署の協力を得て、外部講師として招き、交通安全教育、薬物乱用防止教育等を実施し、自分自身の安全に対する意識を向上を高めることができた。</p> <p>□暑い時期の熱中症対策として熱中症指数が規定値を超えた時には、児童自身が「木陰で休むこと」を伝える注意喚起の校内放送をするなど、自発的な活動も見られた。</p>	<p>◆児童の安全・安心確保を第一優先事項とし、心肺蘇生法、AEDやアレルギーなどの職員研修を実施することを通して、教職員が児童のために必要な安全確保の技能及び意識の向上を図るとともに、学校安全マニュアル・学校安全計画の再整備・更新に努める。</p> <p>◆児童の登下校時の安全確保、交通安全、様々な危機については、保護者・地域及び関係機関と連携、協働し児童の交通事故の防止に努める。</p> <p>◆老朽化による校舎・設備の不具合については、学校用務員による日々の安全点検や必要に応じた修繕のを適切に行いながら、市教育委員会環境整備推進室等と連携し、安全な施設・設備への改善を引き続き図っていく。</p>
12	⑫学校評価を生かした教育の改善・情報発信	<p>◆学校の様子について、保護者の皆様に丁寧に伝えました。</p> <p>◇保護者の方へ連絡したり、児童の様子を保護者・地域の方々にお知らせしたりするために、学校のホームページ等の活用。</p> <p>◇学校から発出する保護者向けの手紙、調査結果等については、紙文書削減のために、ミマモルメのメール機能を活用したペーパーレス化推進。</p> <p>◇児童の学習活動の様子や日々の学校での姿について、12項目の観点をふまえ、学校として、その教育活動にどんな思い願い、ねらいがあるのかについての保護者への配信。</p> <p>◇学校改善のための学校行事・教育活動ごとの保護者アンケートの実施。</p> <p>◇学校評価における中間調査の実施とPDCAのサイクルによる評価・分析の実施と学校運営への即時反映。</p>	<p>□学校・学年だよりにおいて教育方針や児童の様子を保護者・地域の方々にお知らせしたり、随時ホームページの更新に努めた。</p> <p>□学校評価に係わる12項目についてミマモルメのアンケート機能などを活用し、中間アンケートを実施した。その結果、学校運営改善に生かすことができた。</p> <p>□学校行事、教育活動毎に保護者アンケートを実施した。保護者の意見や要望については、教職員全体で共有する中で、実施内容の適切さや内容について、振り返り、今後の学校行事や教育活動の計画や企画に反映させることができた。</p>	<p>◆今後も、引き続き、学校行事や教育活動について、そのねらいや内容について、メールやホームページ、の活用、学校学年だよりの紙面の工夫を行い、丁寧に保護者へ伝えていく。</p> <p>◆学校ホームページの更新やメール配信の頻度をあげるなどして、リアルタイムで学校についての情報を配信できるよう努めていく。</p> <p>◆今年度実施の学校評価に係るアンケートの結果を見ると、保護者回答における「わからない」の比率が非常に多くなっている。これまで以上に、保護者に学校についての情報を配信するとともに、学校評価アンケートの質問事項についても、わかりやすく回答しやすいものにしていく。</p> <p>◆学校評価アンケートの結果や学校の取組については、学校運営協議会と共有し、学校改善に取り組んでいく。</p>

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<p>◆体育館改修工事やエレベーター棟の設置工事などで、また、これからも体育館の冷房化工事、各教室内のエアコンの更新などの工事があると聞いているが、工事に伴う校庭や体育館の使用制限などによって、日々の教育活動に影響がないようにしてほしい。</p> <p>◆学校評価における保護者アンケートの結果が児童、教員と比べて低いことについて、学校のことをもっと知ってもらう機会を増やしたらどうか。例えば、学校に来ていただく回数を増やす。学校ホームページを見ていただける方法などを工夫する。QRコードなどを活用するなどが必要なのではないか。</p> <p>◆学校評価のアンケートの質問文について、どの内容について尋ねているのか分かりにくい気がする。児童にとってもわかりにくいのではないか。保護者に分かりやすい方法での観点で行ったとのことだが、かえって回答しにくくなったのではないだろうか。改善していく必要がある。</p> <p>◆学校を取り巻く環境には、さまざまな情報に溢れている。養護教諭作成の保健だよりで丁寧に情報を配信しているが、今後も健康に関する最新データをキャッチし、正しい知識をもって、教育活動を行っていく必要がある。</p>	<p>■今年度も「自己調整学習」の考え方に基づく教科指導と「心理的安全性」に基づく学級経営の推進を学校運営・学校経営における2つの柱として推進してきた。令和8年度も「自己調整学習」「心理的安全性」についての教職員の理解をさらに深め、実践できるように取り組んでいきたい。</p> <p>特に、第3次川崎市教育振興基本計画「かわさき教育プラン第1期実施計画」をふまえた学校づくり、学校経営に努めるとともに、従来から堅持している学校教育経営構想の重点課題「自分や他者を大切にし、学校や地域、川崎を愛し、自分達の学校を誇れる児童を育てる」という「SHIMOSAKUNOBE PRIDE」を常に意識した児童の育成に取り組む。そのためにも、「地域に学び、地域にかかわること」をキーワードに、地域や企業等と連携した体験的で探究的な学習を進めるとともに、効果的な教育課程を編成しカリキュラムマネジメントの充実・授業改善を行っていく。また、校内研究を通して、川崎市学習状況調査の結果分析をベースとした「思考力・表現力」を育む授業改善、教育課程の充実を図っていく。</p> <p>■別室登校・長欠傾向にある児童の増加をふまえ、その実態を適切に把握し、支援を必要とする児童への共通した指導方法や対応方法、基礎。基本の定着、学び方の習得などについて他の教職員と共通理解しながら、きめ細やかな指導ができるようにしていく。</p> <p>さらに、生涯学習に通じるものとしての「自己調整学習」の考え方をベースに自らの学びをコントロールする力を育み、「かわさき探究2.0」を意識した自立的な学習者を育てる教育活動に取り組み、「自分の学び方を学ぶ」授業の実施を行いながら、児童の自己の学び方に対する意識の醸成をめざす。</p> <p>■さらなる児童支援のために「心理的安全性」の考え方に基づく学級経営を適切に行い、個々の児童の心に寄り添い、安心して過ごすことのできる学級集団づくりを進める。また、学級集団として、個々の「学び」を保障し、児童自身が「いじめ」を容認しない、学級風土の創造に努める。</p> <p>■教職員一人一人が生き生きと教育活動に従事できるよう、業務内容の平準化を行うなどの働き方・仕事の進め方改革を推進しながら、児童一人一人の学びのための校内組織の改革を積極的に進める。</p> <p>■学校運営協議会の協力の下、地域の教育資源や人材の発掘を行い、地域と一体になった教育課程の創造をめざす。地域でどのような児童を育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを地域とともに共有し、地域と一体となって児童を育む「地域とともにある学校」めざしながら、学校運営がさらに前進し、コミュニティースクールの理念に近づくよう努力していきたい。</p>